メシアとしての祐天上人

大正大学教授　玉山成元

『常憲院殿御実紀』によると、元禄十二年（一六九九）二月四日、増上寺住持了也大僧正は、裕天上人をつれて幕府に出むいた。それは桂昌院の推薦により、将軍・綱吉が裕天上人に生実大巌寺（千葉市）住持を任命したためであった。その当時、大巌寺は関東十八檀林の一つに数えられた学問所であり、その住持は、武士なら十万石以上の大名に匹敵する位置にあったといわれる。そのため大名でも特別な態度をとっていた寺である。

祐天上人は檀通上人の弟子として飯沼弘経寺、あるいは鎌倉光明寺で生活をしたが、檀通上人の没後は増上寺にもどり、学頭職までつとめた。しかし檀林の住持に栄転することを好まず、貞享三年（一六八六）増上寺を引退し、江戸市内をはじめ日本各地を旅して自由に布教活動を行い、やがて牛嶋に閑居して六字名号の書写に専念していた。この十余年間にわたる祐天上人の動静は明らかでないが浄土宗教団という枠にとらわれず、のびのびとした生活を続けたものと思われる。だから牛嶋でも本堂や塔を作ることはなく、やがて牛嶋から本所の石原に移り、ここで生活をすることもあったらしい。いずれにしても上人の周囲には、熱狂的な信者も多く、その信者層は武士・商人・農民ら、あらゆる階層の人々によってもてはやされた。そうしたときに突然、将軍・綱吉の直命によって、祐天上人は大巌寺の住持になることになった。檀林の住持がきらいで増上寺を出た祐天上人であったが、皮肉なことにその大寺の住持の台命が下ったのである。いくら栄転を好まぬ上人であっても、これを拒否することはできなかった。こうして元禄十二年、大巌寺住持となった祐天上人であるが、なぜ桂昌院が祐天上人の入寺を懇望したのか、明らかにできないのは残念である。ただ高田衛氏は、祐天上人と桂昌院との結びつきを、出産をめぐる問題としてとらえているのは注目される。高田衛氏は、『祐天大僧正利益記』の中に出てくる話を整理した結果、上人が女人救済者としての姿が強いことを知り、そこに特色を見い出している。つまり利益話の中には、難産で苦しんだ妻の臨終に間にあわなかった主人が、せめて往生してほしいと枕頭で念仏をたむけると、不思議に産婦が蘇生し、女子を出産することができたという江戸高輪八郎兵衛の例や、小水が通じないため危篤状態になった身重の木戸伝兵衛の妻が、裕天上人に六字名号を書いてもらった盃で水を飲み念仏したら、急に体調がよくなって出産することができ、母子ともに助かったという話など、その代表的なものである。女性にとって出産は一生の大事である。しかも難産が上人の奇蹟によって救われた話は、江戸の武士・町人の区別なく、広く知れわたっていった。そのことが、やがて桂昌院の耳に入り、祐天上人との結びつきになったのではないかと考えている。

それも考えられないことではない。綱吉の御台所・鷹司信子には子供がなく、多くの側室にも子供がなかった。そこで桂目院は、綱吉に子供がさずかるよう真言宗の亮賢や隆光に祈禱をさせた。しか

メシアとしての祐天上人

大正大学教授　玉山成元

し、むだであった。ところが延宝五年（一六七七）瑞春院（お伝の方）との間に待望の子供ができた。鶴姫である。さらに延宝七年には徳松が生まれた。しかし天和三年（一六八三）五歳でなくなってしまった。この後は子宝に恵まれず、元禄十二年（一六九九）　姫もこの世を去った。桂昌院はたった一人の孫にも死なれ、綱吉の年齢を考えると、ほぼ世継の望みは失なわれたと思われるが、まだ瑞春院もはかない望みは抱いていたと思われる。そこで江戸の市民に親しまれていた祐天上人を幕府直属の僧侶としてかかえこみ、大巌寺の住持にしようという手段をとったという。結局、綱吉の後は甲府宰相・綱豊（家宣）が将軍となった。家宣も御台所の天英院との子供は死産となり、右近の方との家千代も一歳で逝去、おすめの方との間にできた大五郎は三歳で逝去し、やっと宝永六年、月光院（お喜代の方）との間にできた鍋松が、家継と名乗り将軍となった。

　このように桂昌院や綱吉の死後も、大奥では、なかなか世継に恵まれず心配が続いたが、この間、祐天上人は、よく江戸城の大奥に招かれて法談を行っている。表面的には、祐天上人の法門を聞き、十念を投かって、念仏の功徳のありがたさを味わうわけであるが、高田衛氏の意見は、真意は、世子出産の守り神として祐天上人が利用されたのではなかろうかという。事実はもちろんわからない。世継ができるにこしたことはないが、瑞春院にしても天英院にしても右近の方にしても、あるいはおすめの方にしても、皆子供に早世された人々である。死去したわが子を弔わない人はいない。ことに早世したふびんな子であればなおさらである。だから生き仏と崇敬された祐天上人を招いて仏事をし、法話を聞き、亡き子を追善したのが真意ではないかと私は想像している。心の悲しみをとりのぞき、生きる希望を与えたのが祐天上人の布教であろう。その姿は大奥の場合も、江戸市中の庶民の場合も変わらないと私は信じている。